

3. 看護学部 カリキュラムの検討

「看護学士課程におけるコアコンピテンシー・卒業時到達目標(日本看護系大学協議会,2017)」に基づくカリキュラムの見直し、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーそして授業科目との一貫性の分析を行い、本学の独自性を活かした看護学教育を展開することができるカリキュラムについて、プロジェクトチームで検討を進めた。

1) 現行カリキュラムの課題

上述の、JANPU のコアコンピテンシーにおいても、「全人的に対象を捉える基本能力」が追加され、「患者の反応を説明する力」の強化は必須である。特に、専門基礎科目の知識、理論や概念を活用して患者の反応を説明する力の獲得、さらにはフィジカルアセスメントや臨床推論を強化し、思考力を育成することが重要となる。技術教育が手順や方法にとどまらず、ケア技術を提供する意味や本質的な事柄を確実に学び、目の前の対象にとってよりよい看護ケアについて熟考できるように、学ぶ内容を見直すこと、また、学生の多様性に対応した能力育成を可能とする工夫が必要であることを確認した。

また、ディプロマポリシーで挙げている災害看護、グローバルの視点を学べる必修科目がないことや、地域包括ケアシステムにおけるケアの連続性についての学習状況を確認することを課題として挙げた。

2) 課題への対応

方向性を決定し、課題に対応するために、他大学のカリキュラムの情報収集と分析、ディプロマポリシー評価指標の検討と現行カリキュラムの課題整理、カリキュラムの検討を行った。また、検討のプロセスで本学のカリキュラムで主要概念として挙げている<人間><生活><環境><看護>は変更しないことを確認した。

(1) 他大学のカリキュラムに関する情報収集と分析

他大学のディプロマポリシーとカリキュラム構造に関する情報を収集し、本学と比較分析を行い、本学は「地域の課題」「看護ケアのプロセス」「研究」を重視しているという独自性を抽出した。

(2) 学部教育で活用する理論や概念に関する調査

新カリキュラムの検討に向け、学部教育において概念及び看護理論がどのように活用されているか、69科目を対象に調査した。主要な理論や概念は、網羅されていることが確認されたが、内容については引き続き精査が必要である。

(3) 現行カリキュラムの課題の整理と改善案の検討および提案

災害看護学、国際看護学の科目の必修化、国際看護学を強化するための選択科目「異文化理解看護フィールドワーク(仮)」について検討を進めた。2科目の必修化に伴い、既存科目の統合と学習者の学びやすさを検討し、4年間で学ぶ看護技術

の内容を見直し、フィジカルアセスメント、生活援助論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、治療援助論Ⅰ・Ⅱ、治療学総論の統廃合について検討中である。また、平成31年度より「病態と治療Ⅰ」「病態と治療Ⅱ」の教育内容の組み直しを提案した。

(4) ディプロマポリシー評価指標と評価項目の検討

7つのディプロマポリシーを評価する35の評価指標とさらにそれを卒業時点の到達目標レベルとして表現した51の評価項目からなる4段階（1. わずかに身についた、2. やや身についた、3. わりに身についた、4. 身についた）自記式調査票を作成し、卒業する4回生82名を対象に回答を依頼した。有効回答は55(67.1%)であった。各項目の平均値は3.13~3.6で、最頻値は47項目で4、4項目は3であった。平均値が高い項目は、DP2「人間の多様な生き方や価値観を理解し、尊厳と権利を尊重して、コミュニケーションを取りながら他者と関係性を築くことのできる能力を有している。」の3項目であった。平均値が低い項目は、DP1-1「看護学の概念や知識を活用して、看護の現象を総合的に説明することができる。」DP3-1「統計指標を活用して健康課題を分析し、影響する要因を説明することができる。」DP6-5「グローバリゼーション・国際化の動向を踏まえて、看護のあり方について意見を述べることができる。」であった。

3) まとめ

以上の検討を踏まえて、新カリキュラムを整備していくことを確認した。

- ・災害看護学、国際看護学の必修化に伴い、現行の必修科目から2単位削減する。
- ・専門基礎科目、看護基礎科目から整備を進め、決定後に、看護管理学および看護臨床科目の整備を行う。
- ・4年間で学ぶ技術教育を見直し、看護援助学科目の再編成を行う。
- ・新カリキュラムを検討する際に、理論や概念の活用を確認する必要がある。
- ・選択科目が多いことは本学の特徴であり、学生がニーズに合わせて学べている。しかし各々の科目で履修者数が少ないことも課題である。
- ・学習成果を確実に獲得できるよう支援するために、多様な学習者に合わせた選択科目の配置について今後検討する必要がある。